

第2回洋上風力関係船舶確保のあり方に関する検討会 (議事概要)

日時：令和7年6月16日(金)13:00~14:30

場所：AP新橋 (WEB会議併用)

1. 事務局より、資料に基づいて説明を行った。

2. 意見交換において、以下のような議論があった。

<議事②洋上風力関係船舶の需要予測に関する調査>

○需要予測の設定条件において風車設置場所については基地港から20kmとされているため領海内ということになる。使用される船は原則全て内航船と想定しているのか。

⇒(事務局)船舶の扱いが内航船かどうかは需要予測に影響するものではないため事務局として設定している想定はない。

○今回示した結果はアンケート回答結果をもとに、機械的に試算した一例であり、海外事例等の実績や企業へのヒアリングなども引き続き調査を行い、予測結果の精度を上げ、精緻化することをお願いしたい。

⇒(事務局)承知した。

<議事③洋上風力関係船舶及びその搭載機器に求められる性能に係る調査結果及び今後の調査内容について>

○SOVの設計条件からコミッションングを除外しているが、除外するかしないかで設計条件に違いが生じるのか。

⇒(事務局)コミッションングを除外しないCSOVは、クレーンの大型化や作業員数増加など設計要件が異なる。

○アンカーハンドラー船の設定については作業員の宿泊を前提としているのか。

⇒(事務局)その通り。

○SOVの有義波周期をアンケート結果よりも短めの6.5秒に設定しているのは何故か。

⇒(事務局)実際に台湾で稼働しているSOVの設計条件で設定している。

○SOVやアンカーハンドラーの作業限界について、DP2の位置保持能力は指定海象条件での全方位DP能力計算結果を基に算出するのか。

⇒(事務局)その予定である。

○マリンワランティサーベイからは、DP関連機器のいずれか1つが故障した場合でも、作業限界条件内のDP性能を有することが求められるため、動的な装置の故障時の能力を基準

にした方が競争力はある。また、DP 性能の検討であれば有義波周期 6.5 秒で良いが、船体の動揺解析等を行う場合は 8~10 秒で検討すべきと考える。

⇒ (事務局) DP の設定はフェイラーベースで検討し、SOV の有義波周期については 8~10 秒の範囲で再検討する。

○アンカーハンドラーのボラードプルやウインチ能力について、アンケート結果の数値分布や、最大値 (400t・1,000t) を選んだ理由を確認したい。また、SOV の有義波周期は日本の海域特性を考慮し 8~10 秒で決定して欲しい。

⇒ (事務局) アンケート結果の最大値で設計することとし、ボラードプルは 400t、ウインチは 1,000t で設定した。有義波周期は 8~10 秒で設定する。

○日本の市場には適さない可能性があるため、400t や 1,000t が妥当か再検討した方が良いのではないか。

⇒ (事務局) 対応を検討して参りたい。

○今回試設計を行った船舶が着岸可能な岸壁水深は、どの程度あれば大丈夫なのか。

⇒ (事務局) 基地港は水深 10m であるため、最大喫水 7.4m なら問題なく、余裕水深として 0.5~1m あれば問題ないと考えている。

○日本造船学会出典資料の OSV 向け耐航性基準で耐航性評価を行っているが、他に洋上風力関連船舶の作業限界の基準値について情報がなく、今後海外も含めてヒアリングした方が良いと考えている。

⇒ (事務局) 今後ヒアリングを行う計画は無い。

○試設計について今後どの範囲まで資料を示す予定なのか。

⇒ (事務局) アウトプットは船舶の要目表、一般配置図、機器の要目表の 3 点を予定している。